

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	東京工業大学	
取組学部・研究科等名	全学〔理学部、工学部、生命理工学部、理工学研究科、生命理工学研究科、総合理工学研究科、情報理工学研究科、社会理工学研究科、イノベーションマネジメント研究科〕	
構想名称	日中韓先進科学技術大学教育環	
海外の相手大学	【中国】	清華大学（全学）
	【韓国】	韓国科学技術院（KAIST）（全学）

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

「キャンパス・アジア」モニタリング報告書について

「キャンパス・アジア」のモニタリングは、日中韓質保証機関協議会*¹が実施するプロジェクトで、「キャンパス・アジア」パイロットプログラム*²をケース・スタディとして取り上げ、プログラムの優良事例を抽出しながら、国際的に連携した教育を展開するうえで「保証すべき質」についてより明確にし、3か国間で共通の質保証機関のガイドラインを作成することを目指しています。

モニタリングでは、プログラムの最低限の質を確認するような評価ではなく、国際的に連携したプログラムの現状や質向上にかかる活動を把握・確認し、**教育の質の観点から優良事例を抽出して、それらを国内外に広く発信していくことを目的**としています。

「キャンパス・アジア」パイロットプログラムは、2011年に開始され、5年間のプログラムとして採択されています。その間において、日中韓質保証機関協議会は、モニタリングを2回実施することとしています。1回目のモニタリングは、日中韓各国における関連法規や評価制度・手法を踏まえて、各国が個別に実施することとしました。

パイロットプログラムの取組みは今年度で3年目を迎え、交流の動きも本格化しています。1回目のモニタリングでは、機構の「キャンパス・アジア」モニタリング委員会が定めたモニタリングの基準に基づき、各プログラム実施主体が平成24年度末までの取組みについて自己分析を行いました。この自己分析書に対して書面調査を行うとともに、訪問調査を通じて今年度（平成25年度）までの取組状況を聴取しました。

本報告書は、そのモニタリング結果をまとめたものです。なお、**優れた取組みの抽出**にあたっては、当該大学の自己分析書の文章をもとにし、説明に際して最低限必要な修正を加えました。

さらに、プログラムの今後一層の進展に資するため、**大学から今後の課題点を記載していただき、それに対するモニタリング実施側からのコメントを付記**して、本報告書に掲載しました。なお、このコメントは、モニタリング委員・専門委員の立場からのもので、モニタリング委員会全体の意見を代表するものではありません。

※本報告書の形式について

基準1から4の各基準毎に、「取組みの特徴」の後に、「抽出した優れた取組み」を枠内（）に示し、その理由を付しています。

なお、本報告書の電子版およびモニタリングの基準やプロセスをまとめた『「キャンパス・アジア」モニタリングハンドブック』の電子版は、大学評価・学位授与機構ウェブサイト（http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/jckcouncil/campusasia_monitoring.html）をご覧ください。

*1：大学評価・学位授与機構、中国教育部高等教育教学評価センター（HEEC）、韓国大学教育協議会（KCUE）の3つの質保証機関から構成。

*2：平成23年度大学の世界展開力強化事業タイプA－I：日中韓のトライアングル交流事業として採択された10のプログラム

<目 次>

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準 1 教育プログラムの目的	2
	基準 2 教育の実施	
	基準 2－1 実施体制	5
	基準 2－2 教育内容・方法	7
	基準 2－3 学習・生活支援	9
	基準 2－4 単位互換・成績評価	11
	基準 3 学習成果	13
	基準 4 内部質保証システム	15

<付録>

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

東アジアの理工系大学との間における教育研究の協力の枠組み構築を通じて、卓越した科学技術の素養を持つグローバル人材を育成することを目標に定めており、学修計画（「Study and Research Plan」）や学修の記録（「Study and Research Record」）の様式の開発・準備をはじめとして、参加大学間の丁寧な議論を重ねてプログラムを緻密に計画していることは、進展している取組みである。

3大学共通の実施体制ガイドラインとして、「Implementation Guidelines」を策定し、ガイドラインに基づいて実際に各種の取組みを行っており、体制の構築が進展している。教育内容については、学部・修士・博士の各課程で、学習・研究を段階的に発展させる考え方のもとに、基礎から最先端の授業・研究課題や学外での体験プログラムを組んでいることは、進展している取組みである。参加大学における単位制度や、単位認定・互換について、3大学間で情報の共有と協議が重ねられ、厳密かつ実質的に定義されていることについて、進展している。

優れた取組み

- ・ 本プログラムは、学生に対して学部時代から、修士号または博士号の学位を取得するまでの期間において指導を行うことにより、トップリーダーに向けたキャリア形成に資するものとなっている。学生が他国の研究室に滞在して交流を行い、視野を広げることを通じて、国際的に活躍する独立した人材を育成する。受け入れ・派遣ともに「Study and Research Plan」および「Study and Research Record」を作成する。
- ・ 3大学共通の実施体制ガイドラインである「Implementation Guidelines」に必要な事項が集約されている点が特徴的である。内容は、実施体制や交流形態、学内選考等、全15項目に及ぶ。
- ・ 「(a)セメスター単位の科目履修や研究室での実験等のプログラム」、「(b)研究経験を含むサマープログラム」、「(c)大学院課程研究重視型教育プログラム（大学院共同指導プログラム）」の枠組みは、参加学生の教育研究水準の発展に対応したものとなっている。例えば、単位取得可能なカリキュラムの設定については3大学で協議の上、参加する学生の専門とそのレベルを考慮した基礎から最先端の科学技術までを学ぶことの出来る授業と研究課題、加えて、訪問国の文化や語学を学べるようなプログラムも整備された。さらに、3大学ともに、学外に出てその国の文化や最先端の研究開発現場を実体験してもらうプログラムも実施された。

Ⅱ 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

東アジアの理工系大学との間における質の高い教育研究の枠組み構築を通じて、卓越した科学技術の素養を持つグローバル人材の育成を目指すという視点から、参加大学間で実務面を含めて詳細に検討が重ねられ、プログラムが緻密に計画されている。学修計画や学修の記録を開発・準備し、参加大学の間で合意して共通的に実施できるということは、責任ある大学間交流のひとつのモデルとなる。また、本プログラムが東京工業大学の国際戦略の中に明確に位置づけられている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本学と中華人民共和国の清華大学はダブル・ディグリー（双方学位）プログラムを 2004 年 9 月に開始し、以来両大学の教職員間では緊密な質の保証と制度の確立を行ってきたという実績を持つ。韓国の KAIST との連携は、2009 年 7 月発足の香港科技大学、南洋理工大學、清華大学及び東京工業大学のアジア地域における理工系 5 大学からなるコンソーシアム（ASPIRE League）の枠組みとしては先行的な取組を行ってきた。

2012 年 10 月に公開された「東工大の国際戦略 2012～「世界最高の理工系総合大学の実現」へ向けて～」の「3. 実行計画」「② 海外派遣の増加等による日本人グローバル理工系学生の輩出」「エ）世界トップ大学への学生派遣」「ii）清華大、KAIST 等との学生交流促進と連携構築」において、「2012 年度から、世界展開力強化事業「日中韓先進科学技術大学教育環」による東工大・清華大学・KAIST 間の日中韓の学生交流枠組みを構築し、例えば、清華大学との大学院合同プログラムの改善・拡大や同様の仕組みによる KAIST との連携を検討し当該 3 大学間等のアジアのトップ大学の学生交流を大幅に拡大する」と明記し全学的に共有されている。

（優れている理由）

本プログラムに参加する 3 大学が、従前から緊密な連携を図っていたことは、今回のプログラム形成の基盤になっており、優れている。本プログラムを通じたさらなる高度化も期待できる。また、全学の国際戦略の中に本プログラムが明確に位置付けられている点は、長期的・戦略的にプログラムに取り組む上で優れている。

本プログラムにおいては学生に対して学部時代から、修士号または博士号の学位を取得するまでの期間において指導を行うことにより、トップリーダーに向けたキャリア形成に資するものとなっている。「(1) 国際経験型教育プログラム」では、専門科目に加え「(a) セメスター単位の科目履修や研究室での実験等のプログラム」と「(b) 研究経験を

含むサマープログラム」において、日本文化など我が国に速やかに馴染むような科目や環境研究など学際的なテーマによる講義中心の科目を提供し、さらに、自身が専門とする分野の研究者に属した形で研究指導を受けさせる。大学院学生向けのプログラム「(c) 大学院課程研究重視型教育プログラム」においては、既に研究テーマを決定し学位論文作成の段階にある学生を指導するが、一国一大学の一つの研究室に閉じこもることなく、他国の研究室に滞在し、その研究室の研究者と交流することにより、視野を広げ、国際的に活躍する独立した人材を育成する。この指導にあたっては、両大学の教員が連絡を取り合い、学生の指導にあたらなければならないとし、学位論文の形でこの経験が収斂するような制度設計が行われているところが特徴である。これらのプログラムを質の保証を伴いながら交流・連携をすすめていくための枠組みとして、受け入れ・派遣ともに「Study and Research Plan」および「Study and Research Record」を作成する。「Study and Research Plan」とは母校と受け入れ先の大学の指導教員の助言を受けながら、科目履修および研究計画を立案、留学期間中の指針とするものである。

「Study and Research Plan」についての協議も含め、KAIST、清華大学と2012年1月から2013年2月までの間に計11回、日本、中国、韓国で関係者の会談の場を持ち学費や宿舍利用などプログラムを支える実務的な面も含めて詳細な検討を重ねてきた。

(優れている理由)

構想の目的に対応すべく、学部から大学院にかけて組まれた交流プログラムの実施計画が、参加大学間で綿密な検討を重ねて設計された点が優れている。特に、学生の学修計画を準備し、学修の記録を残すための方策を大学間で協議し、「Study and Research Plan」および「Study and Research Record」という形で合意に達し、参加大学間で共通的に運用している点は、責任ある大学間交流のひとつのモデルとして優れている。さらに、同PlanおよびRecordは、研究指導における派遣・受入れ双方の指導教員の連携や、学生に対する留学前の指導・助言、留学後の成果の確認の際に、3大学でともに活用されている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

すでに同様の内容は他の採択校からも指摘されているが、中国教育部と中国のキャンパス・アジア採択校との間では資金面での完全な合意が得られていない様子である。

現在は「長年の東工大との関係を重視して特別に」清華大学側は本プロジェクトがスタートした時点で約束であった経済援助を自発的に行っている。このような状態ではプロジェクトの安定的な運営と今後の持続可能な教育体制構築に不安が残る。ひとつの大学の取組では限界があることから、今後関係各所に助言や意見交換も求めていきたい。

[大学名：東京工業大学]

○コメント

- ・ 財政面で不安を抱えることは同事業の継続・拡大に支障をきたす恐れがあることから、大学側は引き続き実態把握に努められると共に、政府関係者にも検討を望みたい。

基準 2 教育の実施**基準 2－1 実施体制**

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

本プログラムにかかる 3 大学共通の実施体制ガイドラインとして、「Implementation Guidelines」が策定され、ガイドラインに基づいて実際に各種の取組みがなされている。特に、実施体制のみならず、プログラムの内容等にかかる項目について、丁寧な議論の上に 3 大学で合意されている点は、優れている取組みである。3 大学のこれまでの交流実績を基盤に、さらなる大学間交流プログラムの開発に取り組み、事業の進展を促している。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

当プログラムは、3 大学共通の実施体制ガイドラインである「Implementation Guidelines」に集約されている取組みが特徴的である。内容は、1. 実施体制（プログラムプロジェクトリーダーの責務、合同委員会の設置、特定分野コーディネーター教員の役割等）、2. 交流形態、3. 交流学生数、4. 各大学が実施するプログラムの他大学への周知手順、5. プログラムアナウンスメント、学内選考、相手大学への通知、最終的な採否決定等の手順、6. 科目履修および研究実施に関する計画立案手順（指導教員の関与も含む）、7. Study and Research Plan/Record の利用手順、8. 学生の受入れ大学における身分（授業料、学生に対する滞在費および宿舍の支援など）、10. 受入れ大学による参加学生の科目履修及び研究世界を証明する文書の発行、11. 派遣元大学における参加学生の清華大学の認定、12. モニタリングの実施およびプログラム評価、13. 各国の所管する省庁や質保証機関との協力、14. 附属文書、15. 有効期間、である。

（優れている理由）

プログラムの実施体制のみならず、交流内容や選考方法等の必要な事項が集約され、明確に文章化されている点は、目的達成のための体制構築を容易にするとともに、プログラムの透明性を確保する上で優れた取組みである。3 大学が共通のガイドラインとして取りまとめていることで、相互の誤解がなく確実に機能するような体制が整えられている。他の類似プログラムを実施する大学の参考となる点で、優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

ウェブなどを活用した本プログラムの広報強化と高校を対象とした広報・啓発活動を実施体制の中でより有効に組み合わせて活用していく。

○コメント

- ・ 本プログラムは学部、修士、博士までの多様な段階での派遣・受入れを組み合わせているプログラムであるが、ウェブサイトを見る限りにおいて、大学が指摘した課題のとおり、有効な情報の掲載が少ないように見受けられる。本プログラムの学生に対しては、補助金または大学の独自資金等で、学生の渡航費用等の費用負担を行っているであろうことから、例えば参加中の学生の近況を、高校生等にも親しみやすい内容で定期的にアップするなど、学生の学びの可視化と広報強化の視点を組み合わせることも可能かもしれない（同様の取り組みを行っている大学は、決して少なくない）。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

本プログラムは、学部・修士・博士のそれぞれの課程で、学習・研究を段階的に発展させる考え方のもとに設計されており、キャリア形成と一貫して事業構想が展開されている。単位取得可能なカリキュラムでは、3大学の協議の上、本プログラムの人材育成計画に照らして、基礎から最先端の授業・研究課題まで幅広く用意されている。学外での体験プログラムが組み入れられ、学生が現場体験をもとに創造的な課題に取り組めるよう設計されており、学生自身の教育効果の観点から、非常に有意義な企画である。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

全学の学部、研究科を対象とし、「(a) セメスター単位の科目履修や研究室での実験等のプログラム」、「(b) 研究経験を含むサマープログラム」、「(c) 大学院課程研究重視型教育プログラム（大学院共同指導プログラム）」の三つの枠組みにより実施している。これらの枠組みは、参加学生の教育研究水準の発展の対応したものとなっており、(a)、(b)のプログラムの参加者の多くは初めての海外経験になるため、日本を初めて訪れる者にとっても抵抗無く参加できる工夫を行った。例えば、単位取得可能なカリキュラムの設定については3大学で協議の上、参加する学生の専門とそのレベルを考慮した基礎から最先端の科学技術までを学ぶことの出来る授業と研究課題を用意するだけでなく、訪問国の文化や語学を学べるようなプログラムも整備された。すなわち、清華大学では物質科学の基礎と応用に加えて中国語会話の授業や、KAIST では情報科学や生命科学の最先端を学ぶと共に、外国人のための韓国語と韓国文化、さらには修士論文や博士論文レベルの研究課題を実行するプログラムも設定された。また本学では、学生の専門分野や日本語入門のカリキュラムに加え、本学の得意とする最先端分野、例えば、環境エネルギー、バッテリー、ナノテクノロジー、自然災害対策などについて、全学レベルからプログラムを作り上げ、専門外の学生にも理解してもらえるような授業を用意した。また、科学技術の推進からキャリアパスまでを網羅する内容を、日本とアジアと欧米の文化背景を比較しながら議論する授業も開講した。さらに、3大学ともに、学外に出てその国の文化や最先端の研究開発現場を実体験してもらうプログラムも実施された。

(優れている理由)

プログラムの趣旨を明確に定義することで、広範な分野の学生、指導教員が無理なく参加できる枠組みが整備されている点は優れた取組みである。単位取得可能なカリキュラムに関しては、参加する学生の専門やレベルを考慮して3大学で共同して設計されており、その柔軟性と幅の広さは優れている。特に、最先端の研究開発現場を実体験してもらうプログラムでは、学生が現地学習にとどまらず、見聞した内容を踏まえて創造的な課題に取り組み、また、学生の発表を通じて成果確認が行われており、非常にユニークな活動として優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

派遣、受入れ両方の募集要項がわかりにくいという学生からの問い合わせがあったことから、より交流実態に即した形でわかりやすい募集要項の記述を行い、専用ウェブページなどで周知を図る。

また、学生が各大学に派遣される前に、現地での授業や研究の概要について事前に把握できるよう、3大学での情報共有をさらに強化していく。

○コメント

- ・ 派遣、受入対象の学生向けの事前の情報提供について、様々な媒体を活用し一層の充実を図られたい。
- ・ 情報提供を徹底しないと学修計画、学修記録の仕組みが形骸化するのでしっかりと取り組んでほしい。
- ・ 派遣後は遠隔会議システムなど併用して事後の様子把握にも努めてはいかかが。
- ・ 「学生が各大学に派遣される前に、現地での授業や研究の概要について事前に把握できる」ことは、学生の事前の動機付けや準備等の観点で重要である。そのため、3大学における一般的な情報共有にとどめず、例えば①派遣に先立って学生が準備しておくこと（事前学習課題の提示）、②学生に対する情報提供とあわせて事前学習内容の提示等、③既に参加した学生との意見交換や、④受入れ大学の関係者とのテレビ会議等による適切な情報提供等、優先順位を付して、具体的に見直しをすることが、結果として学生のプログラムに対するコミットメント度合いによい影響を与えると思われる。東京工業大学のキャンパス・アジアのウェブサイトを見つけたところでは、学生からのコメントのとおり情報がわかりにくいことは事実であることから、例えば学生の視点から、具体的にどのような情報を掲載したらよいか等を聴取し、見直しはいかかが。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

学習支援に関して、「Study and Research Plan」および「Study and Research Record」が参加大学間で共有され、派遣前の指導助言等が促進されている。留学中の学生とは、メールにより派遣担当および国際部と定期的に連絡を取り、安否確認、修学、生活上の各種相談に応じる仕組みが整備されている。派遣学生のすべては定期レポートの送付が義務付けられており、国際連携プランナーがそれらにコメント・返信する体制が敷かれている。留学生の受入れについても、24 時間の電話相談対応を行うほか、プログラム・コーディネーターが相談・助言に随時応じるなど、適切な支援体制が形成されている。派遣学生の中には、留学先の生活に関する事前情報への更なる要望もあるため、今後、留学先の生活情報に関して、留学した学生の声を蓄積し、次の派遣学生に情報が提供される仕組みが設けられることを期待したい。また、プログラムの目的や相手大学において履修すべき内容について学生の理解が十分ではなかったことが訪問調査で確認された。事前の情報提供をさらに進められたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

学生のカウンセリングは従前より学生支援センター生活支援部門において日本人・外国人の分け隔てなく実施している。学外の専門相談員による 24 時間対応の電話相談も整っている。(共に英語対応可)

(優れている理由)

学内で問題が解決できる支援体制が整っており、適切な対応として優れている。プログラム・コーディネーターを含めて、留学生に対する相談窓口が開かれている点は、特に短期のプログラムに参加する受入学生にとっては有益な良い取組みである。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

受入れ学生に対する今後の課題としては、**宿舍確保のための来日時期の調整**が挙げられる。民間宿舍は月極めの支払いであることから、月末に来日する際の確保が困難なことがあるためである。

本学から派遣する学生に対する今後の課題としては、従来は学生からの質問を個別に回答を行ってきたが、現在は本プログラムの進展とともに寄せられる質問の傾向性も明らかになってきたため、情報集約を行い専用 HP を通じて適切な情報提供を図る。

海外滞在時の安全対策、危機管理がますます重要な課題になっていることから従前からの「東工大生のための安全な海外渡航の手引き」の大幅なリニューアルと内容の周知徹底を行い、派遣が予定される学生に対して本学指定の海外旅行保険と危機管理サービスに学生負担で加入を求める。

○コメント

- ・ 短期滞在の学生向け宿舎は割高となる点が問題だが、ホームステイの利用も一考の価値がある。
- ・ 来日学生に対する一層の生活サポートの充実と共に、派遣・受入学生の間で生活支援のレベル感の統一を図る取り組みを期待したい。
- ・ 東京工業大学のキャンパス・アジアのウェブサイトを拝見したところでは、学生からのコメントのとおり情報がわかりにくいことは事実であることから、例えば学生の視点から、具体的にどのような情報を掲載したらよいか等を聴取し、見直してはいかがか。特に学生の留学中のプログラムのイメージや単位認定の考え方、また Q&A 等の見直しは可能であると思われる。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

参加大学における単位制度や、単位認定・互換について、3大学間で情報の共有と協議が重ねられ、各大学での単位の考え方や認定単位の上限数等、単位互換システムに関する情報の詳細が、3大学共通のガイドラインである「Implementation Guidelines」およびその「Appendix」に明記されている。その内容は、厳密かつ実質的に定義されており、単位互換のシステム構築にむけた取組みがなされている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

夏季休暇期間および冬季休暇期間において派遣先大学で実施した研究成果については、1週間の研究に対し1単位を認定できることとしている。この認定は単位相当分としての推定を行うもので、5単位を上限としている。認定手続きは、教務担当部署および関連の専攻等において行われる。

(優れている理由)

休暇期間を活用する研究ベースのプログラムの単位認定・互換について新たなルールを設けることで、単位互換の仕組みを制度化している点は評価できる。サマープログラムは参加した学生からの評判も高く、実質的に展開されていることがうかがえる。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 東京工業大学のキャンパス・アジアのウェブサイトに記載されている3点の派遣プログラムのうち、「研究のみ」のプログラムに関しては、派遣先大学において「授業を履修せずに研究に従事」する留学としている。プログラムの趣旨に即して授業と研究を組み合わせた取組みもさらに高度化いただくことを期待したい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

現況では上述の通り、日中韓で単位認定をめぐる相互理解が確立されていることから、今後単位認定の申請がより活発に行われることが予想される。今後一層の単位互換の活性化を図りたい。

○コメント

- ・ 単位互換の活性化にあたっては、単位互換の対象科目や互換数など、本事業の目的に照らした検討の下での一層の推進を期待したい。
- ・ 本プログラムの進展（単位認定を伴うプログラムでの学生の派遣・受入れの一定数の発生）による単位認定の申請の増加に伴い、科目の成績評価の内容・基準等が具体化されるとともに、それらについて3大学間のさらなる共有が図られるなど、いっそうの実質化が進むことを期待する。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

学生に対する履修・研究指導において、双方の指導教員が、「Study and Research Plan」を交わすこととしており、学習成果を測定する方法の一形態であると言える。参加学生と教員双方に対してアンケートを実施していることは優れた取組みである。今後、研究活動を中心とするプログラムとしての、教育目標や人材像に即した学習成果の測定が進められることを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

【受入れ学生】「(1) 国際経験型教育プログラム」および「(2) 大学院課程（修士、博士）学生を対象とした研究を重点に置いた教育プログラム」（英語ではそれぞれ Summer Program 及び Joint Educational Program）の参加学生に対して、2013 年 3 月末までの滞在者を対象にアンケートを実施し、状況を把握すると共に分析を行った。

（優れている理由）

研究に重点を置くプログラムに期待される成果に関わる質問として、「学位取得に向けて役に立ったか」という観点と「(研究活動が) 単位として帰国後認定されたか」という観点を設定していることは興味深い。

受け入れ学生の研究室指導教員にもアンケートを実施しており、学生と指導教員双方の意見を併せて学生の学習状況を分析している。総じて、本学の研究活動については世界の最先端レベルを経験する良い機会を提供し、単位互換については 3 大学で事前の調整が必要という共通認識に至っている。

（優れている理由）

アンケートの分析状況として、最先端の研究活動を経験する機会を提供することについて教員間の共通認識ができていることが確認されたことは、今後のプログラムの充実に向けた示唆となるものであり、プログラムの一層の高度化が期待される。

モニタリング実施側からのコメント

- 国際交流プログラムにおける学習成果については、他大学でも同様に悩んでいる課題といえる。例えばまずは、学生及び受入れ教員が、プログラムごとの目標（ゴールを明確にしつつ）いくつかの項目についてルーブリック式に「〇〇が～まで出来た」等のマトリックスを作成し、受入れ前後でその変容を測定する等の取り組みは一般的であるほか、短期間で異なる文化等を知る観点からは、北米の大学で導入されている IDI 試験を行う等の工夫

[大学名：東京工業大学]

もできよう。ぜひとも「何をもってプログラムの成果・効果」を図るかについて、3大学でさらに協議いただき、それらの結果は、他大学の改善に資する情報として公開いただきたい。

※ *IDI: Intercultural Development Inventory*

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

単位取得方法や認定方法は、制度の違いから単位認定までに時間がかかるなどの困難の報告を受けている。その点を3大学間で協議し、より円滑な単位認定につなげたい。

昨年度派遣した学生が全員帰国後には改めてアンケート調査を実施し、今後の本プログラムの運用に活用することなどが挙げられる。

○コメント

- ・ アンケート調査の継続的な実施と一層の活用に期待したい。
- ・ 3大学共通の仕組みの議論は重要であるが、一方で東京工業大学から派遣した学生の「単位認定までに時間がかかる」事例があるのであれば、同時並行で見直しを進めたらよいのではないか。

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

外部評価委員制度を活用したプログラムのレビューと、改善に向けた取組みが進められている点は、内部質保証や改善の推進の観点から意欲的な取組みであり、優れている。内部質保証の体系的な取組みは、学内におけるアジアに対する重要性の深化にも寄与していることがうかがえる。今後、参加大学間で連携した形での外部レビューが行われるとともに、レビューの改善計画が検討されることを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

プログラム開始の初年度は、2013 年 1 月 18 日に本学で、日本および海外の外部評価委員を招いてアドバイザリーボード・ミーティングが開催され、本プログラムについての評価と今後のアドバイスを頂き、本学出席者とともに意見交換を行った。

(優れている理由)

外部評価委員制度が取り入れられ、上記ミーティングでプログラムの計画についての達成状況が確認されるなど、レビューの仕組みが機能していることは優れている。

本学が長期的な目標の下、米国、ヨーロッパ、そして他のアジア地域における最高水準の理工系大学との間で行う教育研究の連携協力構想と一体的に実施されるものである。

(優れている理由)

プログラムが3大学に閉じることなく、他の交流プログラムと有機的な交流が図られている点は、参加学生にとって交流機会が増えるのみならず、学問的な視野が広がることや学習意欲が高まるうえで、優れた取組みである。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 実施した内容は優れていると思われるので、実施結果のまとめ及び学内外への情報公開・フィードバック状況について、一定の不足が見られる場合は、改善されることが望ましい。

大学が指摘した課題に対するコメント

○大学が指摘した課題

昨年度は受入れた学生を中心にアンケートやフォローアップアンケートを実施したが、派遣学生に対しては単位認定について小規模なアンケートを実施したのみである。派遣学生の派遣期間がサマープログラム中心の受入れ学生と異なり、現地滞在中の学生も多かったことからであるが、6月までには昨年度派遣した学生が全員帰国する予定であるので、受入れ学生と同様のアンケートを実施し、今後より良い内部質保証システム構築に活かす方針である。

また、TIER シンポジウムやアドバイザリーボードで受けた提言、一例を挙げると「受入れ学生の日本企業への英語でのインターンシップ実施」については現在実現に向けて進展中である。

情報の公表・発信については平成25年からは専用HPをリニューアルし、今後の活動をすばやくコンテンツとして活用していく。

○コメント

- ・ 学生アンケートの実施と外部の第三者によるレビューを継続することにより、内部質保証や改善に向けた取り組みが一層推進されることを期待したい。
- ・ 終了後のアンケートのみならず、例えば参加前と後で同一項目で質問を行うほか、言語・文化にかかるプログラムに対してはそれらの評価を測る項目を検討するなど、さらなる高度化に向けた改善が可能と思われる。キャンパス・アジア専用ウェブサイトを確認したところ、特に派遣学生の学びのイメージが、受入れ学生のそれと比して弱いように見受けられるので、具体の学生の活動状況のアップを、こまめに行うことが必要と思われる。